

はやしおうじ

林王子遺跡出土

ゆうこうつばつきどき

有孔罎付土器

この有孔罎付土器は林王子遺跡の3号住居址から出土したもので、縄文時代中期の中頃に作られたものです。土器型式では勝坂3式に相当します。

現高26.5cm、口径15.5cm、胴部径28.0cm。底部及び裏面は残っていませんが、現状では復元されています。

有孔罎付土器は縄文時代中期の中葉から後葉にかけて、関東・中部地方を中心とした地域に多く分布する種類の土器です。口縁部が平坦で、口縁の下に列状の小さな丸い孔と罎状の隆帯があるのが特徴です。

何に使われたものかは、はっきりと分かっていませんが、主な説として酒造具説や太鼓説があります。酒造具説は、中からヤマブドウの種子が出土した事例があることから、果実酒の醸造に用いられ、孔は発酵の際に生じるガスの排出口であると考えられています。太鼓説では、民族事例から上部に皮を張って太鼓として用い、孔は皮を縛るための紐掛けに使われたものと考えられています。

林王子遺跡出土の有孔罎付土器は、平坦な口縁のすぐ下に直径5mm程の孔が等間隔にあげられており、その下には粘土紐を貼り付けた隆帯がめぐっています。胴部は球状に張り、正面中央に人体装飾、左右に蛇体装飾がみられます。人物の頭部両脇には左右に広げるように手が伸びており、胴部の横にも小さな手が垂れ下がっているように見えます。乳房の表現があることから女性像であると思われませんが、足の表現はありません。この人体装飾については、女神を表したものだという意見もあります。裏面が残っていないためよく分かりませんが、他の有孔罎付土器の例から、裏側にも簡略化された装飾があった可能性もあります。

人物の両脇には、頭部を上に向け体をとぐる状に巻いた蛇の装飾があります。この蛇については、頭部が三角形をしていることから、マムシではないかという意見もあります。

器面には丁寧に調整が施されており、現状では彩色の痕跡は確認できないものの、赤や黒などの彩色が施されていた可能性もあります。

有孔罎付土器は日常的な土器とは異なった呪術的な意味を持って作られ、儀礼などに用いられた特殊な土器だったと思われます。

